琉球大学学術リポジトリ

程順則の父と子：程順則の情愛と苦悩

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学法文学部
	公開日: 2007-06-12
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 上里, 賢一, Uezato, Ken-ichi
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/382

程順則の父と子

―程順則の情愛と苦悩―

上里賢一

はじめに

程順則（一六六三～一七三四）は、近世琉球を代表する政治家・外交官・教育者・文学者である。中国と日本を基軸にして、当時の東アジア世界の動向をはっきりと見すえ、ダイナミックで着実な外交を展開した実践的官僚として、また、琉球国のリーダーとして国家経営に力を尽くした人物であった。このように多様な顔を持つ人物について、その家庭における在り方という一面を中心にして、その人物像の一端を描くとどのような側面が見えるだろうか。なかでも彼の父親の程泰祚（号景陽）と、次男の程摶万に関係する文章や漢詩を取上げて、そこに描かれている程順則の情愛や苦悩等を通して、彼における親子関係とこれを中心とする家庭の存在の重さというものを見ておきたい。これが本稿の目的である。親子の関係や家庭の持つ重さとは言っても、一般的な意味においてではなく、あくまでも程順則の文章や詩文に描かれた世界におけるもの、ということにしぼって論じようとするものである。

一、父程泰祚と久米村

程順則は、一六六三年（康熙二）一〇月、父泰祚、母真饒古樽の長男として生まれた。泰祚の父親は外間筑登之実房といって、その五代前の先祖は京阿波根親雲上実基である。泰祚の時久米村の再興策の一翼をになって程氏を継いだ。泰祚の母真饒古樽は、正議大夫鄭子孝（安次嶺親雲上）の長女で、久米村出身である。母親が久米村の出身であることもあってか、泰祚は幼い頃から中国語の練習を積んでいたようで、その力が評価されて久米村に入ることになったようである。(注二)

琉球の歴史では、島津が侵入（一六〇九年）する以前を古琉球と呼び、それ以後一八七九年（明治一二）までの時期を近世琉球と呼んでいる。近世琉球と呼ばれるこの時期は、それ以前とは王国の内容が大きく変わっていく時期である。日本で江戸幕府が成立して近世の幕が開いていったのと歩調を合わせて、琉球も大きな変革の時期を迎えた。もちろん、それ以前にも室町・豊臣政権の影響から完全に自由であったわけではないが、島津支配は、より強く幕藩体制下に組み込まれていくことを意味した。琉球の制度や仕組みが日本的に編成し直されていった時期である。

島津が入って来た頃の久米村は、かなり荒廃していた。一五〇〇年代前半頃までが琉球王国の対外貿易活動が盛んな時期で、中国を中心に周辺のアジア諸国と交易活動を行なっているが、一五七〇年のシャム（今のタイ）への船を最後に、琉球は東南アジア貿易の舞台から退いている。中国との貿易も、明清交代期の混乱の影響もあって、一五〇〇年代後半から一六〇〇年代初期までは、厳しい状況が続いている。

たとえば、一六〇六年（尚寧一八）に渡来した冊封使夏子陽は、今唐栄の残っている家は、「わずかに蔡、鄭、

林、程、梁、金の六家にして族甚しくは蕃せず」と言っている。琉球側の記録でも、この時期の久米村の人口は三十数名という記録もあるほどだ。それほどに久米村は衰退していた。(注二)

このような状態は、中国との交易を継続していきたい琉球にとっては放置しておけない問題だったし、琉球の対中国貿易に魅力を感じていた薩摩側にとっても早急に解決すべき課題だったと言える。両者の思惑が一致して、久米村の強化策が取られることになる。琉球から中国に対して閩人の再派遣要請がなされ、跡継ぎの絶えた家に首里や那覇の有能な人材を入れて立て直すとか、さまざまな方策が実行された。

程泰祚が久米村の程氏を継いだのは、このような状況においてであった。泰祚は、久米村の構成員として力を発揮し、一六五八年（順治一五）には通事の位を得、順則が生まれた六三年（康熙二）には、謝恩存留通事となって、初めて福州に渡っている。順調に昇任して七〇年（康熙九）には都通事となり、その年の進貢在船都通事に任命されているが、病気のため辞退している。それから二年後の七二年には進貢都通事となり、翌年（一六七三・康熙十二）三月渡清している。(注三)

一六七三年（康熙一二）は、中国で三藩の乱が起こった年で、混乱の中へ飛び込むような進貢であった。この時、程順則は、数え年の一一歳であった。泰祚の一行は、福建の沿岸で海賊の襲撃を受け、泰祚自身も重症を負った。傷の治療をして北京へ行き、任務を済ませて福建に帰る途中、蘇州まで来たところで三藩の中の一つである福建の耿精忠の反乱のため福州に戻れず、蘇州にとどまっている間に病を得て死去した。時に順則は一三歳であった。琉球の高い身分の使節である泰祚の死を悼んで、当時の呉県（現在の蘇州）の役人たちが、金を出しあって、墓を造り墓碑を建てている。

この墓は、一九六〇年代まで残っていたが、文化大革命の時破壊され、墓地は学校の敷地の一角になってしまっ

た。その後、名護市と程順則の子孫の要望により、蘇州市人民政府が協力して、一九九四年に上方山の国家森林公園の一角に新しく再建され、蘇州市の歴史的史跡に指定されている。

程泰祚が、中国に渡ったこの時期は、清朝が起って十年程で、清朝の支配はまだ完全なものではなく、地方にはさまざま形の抵抗勢力が活動していた。福州を目の前にして海賊の襲撃を受け、程泰祚も重傷を負ったり、北京から福州に戻る時は三藩の乱の影響で、蘇州で足止めを食うなどの困難に遭遇しているところには、地方の不安定な状況が現れていると言えよう。

中国の混乱は、琉球にも直接影響を与えるが、この時の泰祚ら一行ほど動乱の波にふりまわされた使節も珍しい。とくに程泰祚は、三藩の乱のため福州に帰ることができず、蘇州で帰路の行程の安定を待っている中で、病を得て死去している。先に述べたように、かれは一六七〇年（康熙九）に都通事となり、その年の進貢在船都通事に任命されていながら、病気のため辞退している。それから二年後の渡清であり、しかも、海賊船との死闘で倒れて気を失い、その回復を待って福州から北京までの長い行程を、重責を担って往復するというハードな旅であった。文字通り琉球の国家事業に殉じたものと言える。蘇州の地方官員らが義捐金を出し合って、役目に殉じたこの琉球使節のために、墓碑を建てその功績を記録したところには、程泰祚の行動に対する中国の官員らの深い哀惜と同情が表明されていると言えよう。

順則は、一一歳で死別した父親の墓を二度参拝している。これについては、後で二回目の参拝の時の作品を紹介しながら、もう少し詳しく述べることにする。

二、勤学として福州へ渡る

久米村の子弟は元服前の一二～三歳ごろから若秀才といって年俸が支給されている。これは、首里の子弟にはない制度であり、首里や那覇の場合よりも王府の手厚い保護を受けていたことがわかる。程順則も一二歳で若秀才となり、一四歳で元服して秀才に挙げられている。

一六八三年（康熙二二）二一歳の時、通事に昇任し「勤学」として中国に渡る。翌年は北京まで旅して福州にもどり、八七年（康熙二六）までの四年間滞在して学習した。この時、終生の師となる陳元輔（昌其）[注四]との出会いがある。

「勤学」とは、福州の柔遠駅（琉球館）を拠点にして、福州で適当な指導者について勉強する留学のことで、公的な教育機関である国子監に派遣される留学生を「官生」と呼ぶのと区別している。久米村の子弟にとっては、職能上の有用性から手厚い保護があった。彼らは、王府と薩摩の対中国貿易振興の目的を実質的に支える実務者として期待され、国の貿易業務の遂行に必要なさまざまな実用的知識を習得することが求められた。たとえば、通訳業務、清国の官僚との交渉、文書の作成と管理、航海技術、船の修理等のほか、儒学の知識習得や詩文作成に習熟することは、役人として身につけなければならない必須の教養であった。定員が王一代に四人と制限されている官生だけでは、これらの多岐にわたる久米村の業務を恒常的に担っていく人材の養成は不十分であり、そのために、久米村の子弟たちは一定の年令に達すると、知識や技術の習得のために「勤学」となって福州に渡った。

ところで、程順則が「勤学」として最初に福州に渡った旅には、福州での勉学という目的の他に、もう一つ大きな目的が隠されていた。「家譜」にも、琉球側の正史（『球陽』・『中山世譜』）にもその渡唐の目的については全

く記載されていない。しかし、その「家譜」を見ていると、「勤学」として福州に着いて約半年後（一行の福州到着は一六八三年・康熙二二年一二月である）、「次年五月二十四日、福建起身、八月二十四日京に到る」[注五]の記事がみえる。二十一歳の若者が、上京使節の一員になり、皇帝の主催する宴会に陪席し、下賜品を与えられるということは、破格の待遇といわねばならない。ここには、正式な記録に記載されている名目と、その裏にある実際の目的との、うまい使い分けがある、とみるべきではなかろうか。つまり、謎が隠されていると言える。一つは、清朝の統治がまだ不安定な時期に使節となって、その生命を懸けて使命を全うし、帰らぬ客となった程泰祚の業績に対する琉球国王のねぎらいの意図と、清国の皇帝も琉球側のこの意図を理解し、これに応えたということ。もう一つは、この時の程順則の上京の目的には、初めから父泰祚の墓参があったのではないか、ということである。しかし、墓参については、「家譜」にも記載がない。理由は、「墓参」という私的な目的で、上京使節となることには不都合があり、正式な文書に記載するわけにはいかない、という事情があったのではないか。「勤学」という名目で福州に渡った彼が、上京使節の一員に加えられ、父泰祚の墓を弔ったことは、この時「墓参」の様子を詠んだ「姑蘇省墓」という作品から明らかである。そこには、王府と清国政府の「意気な計らい」がみてとれるし、程泰祚の業績にたいする評価がいかに高いものであったかが、表れている。「姑蘇省墓」は、後で詳しく紹介したい。

一六八七年（康熙二六）、二五歳の夏帰国し、一年半後の一六八九年（康熙二八）二七歳の時、接貢存留通事となって二度目の渡清。二九歳までの足かけ三年間滞在。福州滞在中、「柔遠駅土地祠記」・「柔遠駅崇報祠記」の二つの文章を書いて、中国で亡くなった先人の霊を慰めている。また、帰国に臨んでは福建で『十七史』（一五九二巻）を自費で購入し、帰国後孔子廟に献上している。彼の二〇歳代は、前後二回合計七年間の留学生活に見られるように、自己研鑽の日々であったと同時に、琉球の文化的地位の向上、なかんずく久米村の力量を引上げること

に全力を注ぐ決意を固めた時期でもあった。柔遠駅に土地祠と崇報祠を建てて、その文章を書いたこと、『十七史』を購入して帰国したことなど、以後の活動の祖形がここにすでに表われている。

三、政治治家・教育家・詩人としての活躍

これ以後の程順則の生涯について、その『家譜』を参考にしながら、略述しておこう。

福州から帰国した彼は、漢字筆者、講解師などの役に就き、順調に出世して一六九五年（康熙三四）三三歳で都通事の位に昇り、翌年進貢北京大通事となって三回目の渡清、九八年六月帰国した。この時の福州から北京までの往復の旅に取材した作品集が、『中山詩文集』中の白眉『雪堂燕遊草』[注六]である。

帰国後の程順則は、尚貞王や世子尚純から大切にされ、世孫尚益に四書や唐詩を講ずる一方、位階・官制等の制度を整える重要な職務につき、たびたび王や王世子から報奨の品を下賜されている。役職も一七〇四年（康熙四三）四二歳で中議大夫、〇六年（康熙四五）四四歳の時、正議大夫と順調に昇進した。四〇歳以後は、詩よりも文章を作ることが多かったようで、残っている作品はほとんどが文章である。〇六年に「中山王府官制」の序文と「廟学紀略」を書いたのをかわきりに、〇八年（康熙四六）『指南広義』、一六年（康熙五五）「琉球国創建関帝廟記」、「琉球国新建至聖廟記」、一九年（康熙五八）「新建啓聖公祠記」を書いている。久米村のリーダーとして、いよいよ油がのってきた感じである。

一七〇六年（康熙四五）四四歳の時には、進貢正議大夫となって四回目の渡清をしている。翌年四五歳の時、北京へ向かう途中山東省曲阜の孔子廟を訪ねて、前年に書いたばかりの「廟学紀略」を献納した。〇八年（康熙四七）

四六歳の時帰国するが、この時福建で自費六〇金を出して『六諭衍義』と『指南広義』及び次男搏万の『焚余稿』を板行している。この間にもかつて四書・唐詩を講じた尚益が即位（一七一〇年）すると、王命を受けて『春秋』・『貞観政要』を進講している。

一七一四年（康熙五三）五二歳の時には、慶賀使節の掌翰史となって江戸に上り、この時薩摩で薩州大守中将吉貴公に『六諭衍義』を献上している。吉貴公は一九年（康熙五八）、これを将軍吉宗に献上し、吉宗は荻生徂徠に訓点・室鳩巣に和解を命じ（二一年）、幕府版『官刻六諭衍義大意』を作っている（二二年）。江戸では、新井白石や荻生徂徠らと面会、帰りには草津で摂政近衛家熙公より、鴨川にある別荘物外楼の詩文を作ることを依頼される。翌年五三歳の時、薩摩から帰国すると紫金大夫に上り、久米村で最高の地位である総理唐栄司（久米村総役）となっている。この年近衛家熙公に『詩韻釈要』と孔子廟で買った孔林の楷杯を献上している。

久米村総役となって力を入れた政策は、久米村の教育の振興であった。一七一八年（康熙五七）五六歳の時には、琉球最初の国立の教育機関である明倫堂を孔子廟の隣に建て、明倫堂内に啓聖祠を作って、啓聖（孔子の父親）及び顔子・曾子・子思・孟子の父親の神位を祀った。一九年（康熙五八）は、尚敬王の冊封の年であり、正使海宝・副使徐葆光ら一行六四九人が渡来した。この年の冊封は、総人員の数・滞在日数・携帯品量のいずれにおいても、従来の例にない大がかりなもので、受け入れる琉球側には何かと困難の多いものであったが、程順則は後輩の蔡温とともにその接待と交渉の責任者として応対した。

一七二〇年春には謝恩使節として、冊封使一行と共に渡清した。五回目の中国訪問である。中国に渡るたびに、自ら費用を投じてさまざまな書籍を購入したり、琉球人の作品を刊行してきたが、今回も『皇清詩選』（全三〇巻）数十部を購入して持ちかえり、王府の書院や久米村の孔子廟に献納している。先にもふれたように、この時の渡清

以前にすでに琉球の詩人の作品がまとまった形で中国に紹介されており、『中山詩文集』出版の準備は整っていた。公務を終えて北京から福州にもどった程順則は、おそらく自ら最終的なチエックを行い一七二五年（雍正三）の刊行にこぎつけたものと思われる。

五度目の渡清をおえて帰国（一七二一年・康熙六〇・五九歳）してからの程順則は、精力的にこなしてきた外交と教育の一線から退いていた。一七二八年（雍正六）、名護間切総地頭職を拝領し、これ以後名護親方と称するようになった。順則は、役職は久米村総役という久米村における最高の地位に上り、留学の時期を含めて五回も清国に渡り、使者となって江戸へも派遣されるなど、琉球を代表する外交官としても活躍した人物であった。

四、姑蘇省墓に見る父子の情愛

程順則は、琉球の三司官座敷（相当）、久米村にあっては総役という最高の位にまで上り、北京や江戸へ琉球の使者として赴くなど外交面でも活躍し、教育者、文学者として内外に知られる輝かしい業績を持つ人物である。しかし、家庭的には年少の頃から身内に不幸が続き、終生孤独と憂愁を背負っていた。

一般的な意味では、その受け止め方の違いはあれ、苦難や孤独を経験しない人間はないと言えるが、程順則の孤独、不幸、苦難、憂愁の実相にふれると、その深さと大きさは誰もが味わうようなものとして一般化してしまえない重さで迫ってくるものがある。普通の人なら、肉体的・精神的な存立の危機に陥る程の深淵から、這い上がってたくましく生き続けた。

程順則が味わった最初の悲哀は、一三歳の時（一六七五年）の父泰祚の死去であった。薩摩が琉球に入って久米

村の強化策をとる時代の機運に乗って程氏を継いだ泰祚は、順調にその能力を発揮して王府の対清国外交の任務を遂行しつつあった。泰祚はその任務を帯びて渡清し、その途中で蘇州において死去したのであった。前々年、十一歳の時中国に旅立つ姿を見送ったが、これが、父親との永遠の離別になった。

「姑蘇省墓」は、程順則が三五歳の時、北京大通事となって上京した時、蘇州にある泰祚の墓に詣でた時の作品である。

二首あるが、「其の二」の首聯に「看るに忍びんや霜露の蘇州に下るを／十四年中　涙復た流る」とあることに基づけば、十四年前は、程順則の二一歳にあたる。先に、「勤学」となって渡唐し、上京使節の一員に加えられたという事実に王府の配慮があったのではないか、と述べた根拠としたものである。これで明らかなように、彼はこの時、父親の墓前に詣でていた。

そして、今度は進貢北京大通事という、進貢使節の実務担当の責任者として堂々と墓参りを行った。「姑蘇省墓」は、父親に寄せる痛切な思いの詠出である。ここでその作品を紹介しておこう。

姑蘇省墓　　其一

労労王事飽艱辛　　王事に労労して　艱辛に飽き
嬴得荒碑記故臣　　嬴得たり　荒碑に故臣と記すを
万里海天隔生死　　万里の海天　生死を隔つるも
一時父子夢魂親　　一時に父子　夢魂親し
山花遥映啼鵑血　　山花　遥かに映ず　啼鵑の血

野蔓猶牽過馬身　野蔓　猶牽く　過馬の身
依恋孤墳頻慟哭　孤墳に依恋して　頻りに慟哭すれば
路傍樵客亦沾巾　路傍の樵客も亦た巾を沾す

同　其二

忍看霜露下蘇州　看るに忍びんや　霜露の蘇州に下るを
十四年中涙復流　十四年中　涙復た流る
鹿走山前松径乱　鹿は山前を走りて松径乱れ
烏啼碣上墓門秋　烏は碣上に啼く墓門の秋
凄涼異地封孤骨　凄涼たる異地に孤骨を封じ
慙愧微官拝故丘　慙愧す微官　故丘を拝す
過此不知何日到　此を過ぐれば何れの日に到れるかを知らず
茫茫滄海望無由　茫茫たる滄海　望むに由なし

この作品は、一六九八年（康熙三七）福建で版行された『雪堂燕遊草』に収録されている。『雪堂燕遊草』は、彼が進貢北京大通事の役目を担って、康熙三六年に耳目官毛天相池城親雲上安倚、正議大夫鄭弘良大嶺親雲上に随行して、福建から北京までを往復した時の作品を集めたものである。旅程にしたがって経過した土地の風景や各地方での役人・文人との唱和、北京での進貢品の進呈の様子と皇帝から賜った品物と宴会の様子など、内容は多様である。華やかでめでたい作品、景勝地の風景の美しさ等が多い中にあって、姑蘇省墓二首は哀切に満ちて、読む者

の涙を誘うものとなっている。

「その一」の首聯では、父親が琉球の国王の臣下として、その職務に殉じたが、立派な墓碑にその名を残したことが述べられ、頷聯では、父子の情愛が語られる。万里の彼方に隔てられ、しかも、一方はあの世に一方はこの世にと、幽明界を異にしているが、墓前に額ずくと父を思う子の情は、二人を隔絶するあらゆる条件を超えてすぐに一つになるという。頸聯・尾聯では、墓の周辺の様子と作者の行動が激烈に詠まれる。山の緑の中に真っ赤に咲く花、馬の足にまつわり着く野の蔓。墓碑にすがって激しく声をあげてないていると、通りすがりの樵ももらい泣きする。

「その二」では、「看るに忍びんや　霜露の蘇州に下るを／十四年中　涙復た流る」と歌い出し、「此を過ぐれば何れの日に到れるかを知らず／茫茫たる滄海　望むに由なし」と結ぶ。全体としては、父親一人を異国の地に葬って墓参り等も意のままにならず、はがゆい思いで慙愧の涙にくれる親不孝な息子の詠嘆である。

五、『「焚余稿』に見る父親の愛

家譜を見ると一七歳の時（一六七九年）祖母を失い、三二歳（一六九四年・康熙三三）の時、四男を出産したばかりの妻が正月五日に二九歳の若さで死去、翌年二月には母親を失う。三六歳（一六九八年・康熙三七年）の秋には、長男の妻が一八歳で他界している。この年には『雪堂燕遊草』が刊行されているが、彼をとりまく家庭的な状況は悲哀に満ちたものであったことは想像に難くない。

そして、決定的な打撃となったのは、一七〇二年（康熙四一）の一連の不幸であった。この年は、三月に三男搏

雲が一一歳で死去、六月には、弟の順性が中国での公務を終えて帰国する途中遭難して死去、翌七月長男搏九が二二歳で他界、九月には次男搏万が一四歳で死去した。順則はこの時四〇歳であった。わずか半年ばかりの間に、三人の男子と弟を失った精神的衝撃は計り知れないものがあるが、一七二九年（雍正七）六七歳の時は、ただ一人残っていた四男の允升が、北京大通事として渡清した旅の途上山東省で亡くなり、すべての男子を失った。ここに至って「器宇深沈にして学識豊富なる流石の順則も、人生の果敢なさに門を閉じて客を謝し、此世を隠遯せやうとした」（『琉球之五偉人』）という。

このような失意と絶望の淵からかれは蘇り、四年後の一七〇六年（康熙四五）、四四歳の時に、進貢正議大夫となって四回目の中国への旅に出ている。そして、一七〇八（康熙四七）に帰国するが、この時福州で自費で『六諭衍義』と『指南広義』を出版し、同時に次男の詩集『焚余稿』[注七]を板行した。これには、福州の師匠陳元輔の序文がついている。

吾門の程雪堂、子に搏万あり。蚤歳より詩を能す。毎に海外に生長するを以て、未だ余に見ゆるを得ざるを憾となすと。且つ言う、其れ夢寐の間、或いは之に見ゆるが如しと。饗に余に往けば、亦た至ると云うも可なり。余、果して何を以って此れを搏万に得たるや。

搏万、稚齢なりと雖も、学に力む。即ち痾みて牀蓐に臥すも、手に巻を釈かず。此の如きの人の有るに、天其の才を老はしめず、反って其の算を促す、天なるかな、問う可からず。丙戌の冬、雪堂門に来たる。搏万の焚余稿数首を袖し、余に之に序せんことを乞う。

余、閲すること再に至る。明暢流転、字字仙ならんと欲す、鬼才にあらずや。雪堂の為に惜しむを禁ぜず、且つ搏万が為に之を傷めり。天、之に仮すに年を以って使めば、杜陵の堂奥を窺い、大程氏の家声、正に未だ量る

可からざらん。夫れ何ぞ白雪の歌未だ終わらざるに、芳蘭の花已に謝す。仙か、鬼か、余又何ぞ能く之を測らん。

摶万已に余に見ゆるを得ずして長逝せり。余も復た摶万を見るを得ずして、且つ老いたり。悠たる之れ此の恨み。永く幽明を隔て、僅かに残稿数行を留め、余の太息を助く。

丙戌　陳元輔序

この序文を恩師陳元輔に依頼したのは、三人の息子が相次いで死去してから四年目である。陳元輔は、程順則が初めて福州に「勤学」としてやって来て、その門下生となって以来の関係であり、すでに二〇年を越える師弟関係にある。程順則の悲哀と絶望の深ささが、どんなものであるか、説明もいらなかったに違いない。この序文を見ると陳元輔の心情が全編にあふれている。

「摶万、稚齢なりと雖も、学に力む。即ち痾みて牀蓐に臥すも、手に巻を釈かず。此の如きの人の有るに、天其の才を老はしめず、反って其の算を促す、天なるかな、問う可からず」。摶万が才能に恵まれたうえに、向学心にみちた少年だったことを称え、そのあまりに短い命を愛惜している。おそらく、父親の順則からその子弟のこと家族のことは、聞かされていたろうし、子息が次々と死去した今度の不幸については、当然詳しく聞いている。無口な順則の手をとって、涙する師匠の姿が見えるようだ。二人は師弟関係にあるとは言え、年齢にさして大きな差はなかったようである。

序文を依頼された陳元輔は、少年摶万の作品を見て「仙か、鬼か、余又何ぞ能く之を測らん」と、その才能について過剰とも思える最大級の賛辞を贈っている。ここには、もちろん幾分かの形式的なものがあることは、否定できない。中国に伝統的にある死者を弔う挽歌や、墓碑銘等の文章は、その人物の生前の業績を顕彰し誉め称える

内容のものである。しかし、搏万の場合は社会的な活動実績を積む以前に死去しており、どうしてもその才能の面を強調せざるをえない。過剰とも思える言葉でその才能を称えることで、残された父親の心の空洞を埋めようとしたのだ、と理解したい。

程順則にすれば、夭折した息子たちに対する哀悼と、社会的な業績と言えるものをほとんど残さずに他界した息子たち（四男の允升は、北京大通事として活躍しているが）のこの世における足跡を何らかの形で残したい、という強い思いがあったと言えよう。これが、『焚余稿』を板行する動機になったと見てよいのではないか。

『焚余稿』には、十一歳から十四歳までの作品十首が収録されている。学習途上にある少年の習作であるが、押韻、平仄など漢詩の規則も踏まえており（おそらく父親程順則の手が入っているだろうが）、みずみずしい表現は、その才能の片鱗を見せている。陳元輔の序文を見て、父親の程順則の息子によせる哀惜は、いっそう深まったであろう。

『焚余稿』に収録されている作品を紹介しておこう。作品は全体で十首あり、五言絶句三首、同律詩二首、七言絶句四首、同律詩一首となっている。作品は年齢順に掲載されている。ここでは、掲載順に従って見ていくことにする。

春日登山　　十一歳作

春山一望景無窮　　春山一望すれば　景窮まりなし
海色蒼蒼万里空　　海色蒼蒼として　万里空し
飛鳥数声雲幾点　　飛鳥数声　雲幾点

何時収入画図中　何れの時にか収め入れん　画図の中

春の穏やかな日の山からの眺望である。沖縄の山というとすぐ北部を連想するが、これは、少年が歩いて行ける身近な場所と見るべきであろう。少年の住む久米村からだと、「筍崖夕照」の名で中山八景の一つにもなっている波の上をはじめ、奥武山、小禄の高台、もう少し足をのばせば瀬長島などがある。いずれの場所からも海を見渡すことができる。

この作品は、いかにも習いたての初学者という感じのするものであるが、イメージが生き生きとしており、夢に満ちて溌剌とした少年の姿が、印象的である。使われている漢字も易しいものばかりであり、題材として取り上げた風景も身近かで、特別新鮮なものではない。

それでいて、読む者にさわやかな印象を与えてくれる。その第一の理由は、少年の感覚の瑞々しさであろう。それは、成熟した大人の失ってしまったものであり、取り戻したいと願うものである。結句の「何れの時にか収め入れん　画図の中」という表現は、少年らしい夢のある表現である。これは、宋の蘇東坡が、盛唐の王維の作品を評して「詩中に画あり、画中に詩あり」と述べた故事を典故にしている。二十才の若さで科挙に合格し、詩人として画家として活躍した天才王維に憧れ、自分も王維のように官吏として、詩人たしてまた画家として世の中のために貢献したいという夢を語ったものである。

上巳

上巳日清和　上巳　日清和にして
江干好放歌　江干　放歌を好む
羽觴流曲水　羽觴　曲水に流す
風起送微波　風起りて微波を送る

「上巳」は、三月三日のこと。陰暦三月の上旬の巳の日。この日、川で身を清める習俗があった。魏以来、三月三日とした。「羽觴」は、さかずき。すずめが羽をひろげた形のさかずき。「羽觴流曲水」は、「流觴曲水」のこと。上巳（三月三日）の日に、曲がった小川の流れに杯を浮かべ、詩を作り酒を楽しむ宴会。晋の王羲之の「蘭亭の記」を踏まえた作品。

懐　人　　人を懐う　十二歳作

雲尽天辺夜気涼　雲天辺に尽き夜気涼し
草堂独坐月如霜　草堂に独り坐せば月霜の如し
笛声忽繞寒窓外　笛声忽ち繞う寒窓の外
遥憶美人水一方　遥かに美人を憶う水の一方

宋の蘇東坡（一〇三六～一一〇一）の「前赤壁の賦」に、この詩の結句「美人を憶う水の一方」が、「望美人兮天一方」（美人を天の一方に望む）と詠まれている。この表現を踏まえたものである。

立春

春到名園淑気回　春　名園に到り　淑気回る
林花漸欲向陽開　林花　漸く陽に向かいて開かんと欲す
捲簾尽放東風入　簾を捲いて尽く放ち東風を入る
暖日宜人酒一杯　暖日　人に宜し　酒一杯

春のさわやかな風が吹いて、庭の木々の花も開きはじめた。窓のすだれをすべて捲いて、春の風をいっぱいに入れた。この暖かな日は、一杯やるのに良い。

十二歳の少年で、「宜人酒一杯」というのは、ませすぎかもしれない。これも、早く大人の仲間入りをしたいという、背伸びした表現とみるべきであろう。

歩月

中庭満樹白璘璘　中庭満樹　白璘璘
万里清光絶点塵　万里清光　点塵を絶つ
尋句踏残三径後　句を尋ねて踏み残す　三径の後
夜深欲問広寒人　夜深くして問わんと欲す　広寒の人

月のきれいな夜だ。月光に誘われて庭に出ると、空も大地もどこまでも澄みきっている。この美しい夜にふさわしい詩を何とか一首作りたい。詩情をかきたてる清らかな夜だが、気に入った一句が出てこない。適当な一句をも

とめて庭を歩きまわっているうちに、夜はふけてきた。苦吟の状況を素直にそのまま表出して、それで澄んだ月の美しい夜の光景が、はっきり伝わってくる。

「三径」は漢の将矩が、庭の小道に松、竹、菊を植えて、欲が少なく、節を持する生活に憧れた故事による。「広寒人」は、月にある宮殿とそこに住む常蛾という美人のこと。

上　元　　十三歳作

端門双闕徹明開　　端門の双闕　徹明開く
無数花燈繞露台　　無数の花燈　露台を繞う
月映陌頭千点火　　月は陌頭に映ず　千点の火
香生庭外万枝梅　　香は庭外に生ず　万枝の梅
宝坊遊子吹歌管　　宝坊の遊子　歌管を吹き
画閣佳人送酒杯　　画閣の佳人　酒杯を送る
車馬分宵帰院宇　　車馬分宵　院宇に帰る
江城夜静漏声催　　江城夜静かにして漏声催す

「上元」は、陰暦の一月十五日のこと。元宵ともいう。蘇東坡の作品をはじめ、多くの典故を用いていることから明らかなように、力のこもった一作である。頷聯、頸聯の対句も、形はできている。「端門」は宋の都開封の宣徳門のこと。蘇東坡の「上元の夜」に「前年侍玉輦　端門万枝燈」とある。「分宵」は、分夜（夜中）のこと。

題香雪居和陳枕山師祖原韻　　香雪居に題し、陳枕山師祖の原韻に和す

一樹梅花勝十朋　一樹の梅花　十朋に勝る
羅浮山上幾人登　羅浮山上　幾人か登れり
清香不散金樽酒　清香散ぜず　金樽酒
乗興題詩費剡藤　興に乗じて詩を題し剡藤を費やす

詩題の「陳枕山師祖」は、父順則の師匠、陳元輔のこと。「剡藤」は、高級な紙の一種。剡渓でとれるい藤を原料としたもの。

詠竹

庭前百尺竿　庭前　百尺の竿
九十夏生寒　九十の夏寒を生ず
高節圧花径　高節　花径を圧し
清姿護玉蘭　清姿　玉蘭を護る
月来生個個　月来たれば生個個たり
風過動珊珊　風過ぐれば動きて珊珊たり
群木凋霜落　群木　霜に凋みて落ち
虚心独自安　虚心　独り自から安らかなり

庭に生えている竹を取り上げて、その高節を蘭に喩え、どのような厳しい状況にあっても、その節を曲げない意志の強さを詠んだもの。「高節　花径を圧す／清姿　玉蘭を護る」、「群木　霜に凋みて落ち／虚心　独り自から安らかなり」という表現に、何とか竹の理想的な姿をこめようとしている。古来多くの類似作があり、典故もほぼ似ているため、よほどの力量がないと類型的な範囲を超えられない難しさがある。ここでは、作品としての独自性を求めるよりも、少年がこれからの人生で如何なる困難に遭遇しようとも、純粋に真っ直ぐに生きていこうとする姿勢を汲み取るべきであろう。

竹は、中が空であるために、かえって良くしなる。幹に節があって、しかも曲がらずに真っ直ぐに伸びる。季節が変わって、周囲の木々が葉を落としても、竹はその葉を落とさない。寡欲、高節、強靭等人間の理想が凝縮されている。そのため中国の文人たちは、庭に竹を植えると言う。蘇東波は「料理に肉がないのは我慢できるが、住宅に竹がないのは良くない」（緑筠詩）と言っている。

題水竹居　　水竹居に題す　十四歳作

我愛四隣竹　　我愛す四隣の竹
江辺護草堂　　江辺　草堂を護る
三春蔵細雨　　三春　細雨を蔵し
六月起微涼　　六月　微涼起きる
秋至水添碧　　秋至れば　水　碧を添え
晩来山映蒼　　晩来れば　山　蒼に映ず

幽居喜得此　　幽居　此を得て喜び
日日好開觴　　日日　觴を開くを好む

詩題の水竹は、水と竹。また、水辺の竹。作者の住む久米村には、生け垣に竹と石垣を配した屋敷が多かった。「久米村竹籬」は、中山八景の一つになっている。この詩は、竹に囲まれた久米村の自宅周辺に題を取ったものであろう。

詠　蘭

紫茎緑葉満庭幽　　紫茎緑葉　庭に満ちて幽なり
独秀園中一片秋　　独り園中に秀ず　一片の秋
空谷無人名月夜　　空谷無人　名月の夜
幽香不散客滞留　　幽香散ぜず　客滞留す

これは、庭の一角に咲く蘭を題材にしたもの。蘭は、その花の美しさと香りが、人々に愛され、とくに教養豊かな人物の内面に秘めた徳に喩えられることが多い。だから「空谷無人　名月の夜／幽香散ぜず　客滞留す」と詠んだのである。人気のない空谷に咲いても、その香りに客は立ち止まると言うのである。少年にしては、でき過ぎた処世態度であり、生意気に人生を達観したような口ぶりに見えなくもない。

しかし、早熟な少年が精一杯背伸びして、大人のような口を利いたものと見ると、まあまあ、そんなに肩を張ら

なくても、と言ってやりたくなる。

以上、『焚余稿』に収められている作品を見てきたが、全体として少年の習作というレベルを脱しないもので、力みや、背伸びは至る所に見える。しかし、その未熟さを補って余りあるものがある。感覚の瑞々しさ、さわやかさ、夢に向かう積極性、純粋性等である。

こうして見てくると、陳元輔がこの詩集の序文で、「仙か、鬼か、余又何ぞ能く之を測らん」とその才能と可能性を称え、「摶万已に余に見ゆるを得ずして長逝せり。余も復た摶万を見るを得ずして、且つ老いたり。悠たる之れ此の恨み。永く幽明を隔て、僅かに残稿数行を留め、余の太息を助く」と、そのあまりに早い死を悼んでいるのは、十分肯けるところである。

おわりに

妻を失い（間もなく再婚した）、弟を失い、四人の男子に先立たれた孤独と失意の中で、程順則の内面的支えになったのは、尚貞王をはじめ王世子・王世孫らの物心両面での恩愛と蔡温ら同僚の激励であった。四二歳（康熙四三年）の頃といえば、失意と孤独のどん底にあったと思われるが、王世子尚純と世孫尚益は王府に召し出して、朝は四書を夕方は唐詩を講義させた。そして、歳暮・元旦には使者を派遣して儀物を贈り、那覇へ下りることがあると、自ら久米村の程家を訪問したりしている。また、後輩の蔡温は、門を閉じて客との交際も絶って、隠者のような生活を送ろうとしていた順則に心からの激励の文章を書いてその決心を翻へさせようとした。[注八] 家庭的に恵まれな

かった順則だったが、王府をはじめ先輩や同僚からの信頼は厚いものがあり、それが、かれの社会的活動を展開する力の源泉となっていたようである。

体力、気力とも充実した時期に味わった失意と苦悩が、その後のかれの詩作にどのように反映したか、残念ながら見ることはできない。四十歳の時、三人の子供を失った後も、著作活動は続いている。しかし、その多くは、『中山王府官制』（四四歳）、「廟学紀略」（同）、『指南広義』（四十六才）、「琉球国創建関帝廟記」（五十四歳）、「琉球国新建至聖廟記」（同）「新建啓聖公祠記」（五十七歳）等の文章であり、自己の著作を含む内外の著作の整理と紹介である。

もちろん、これらの活動の中には、『六諭衍義』（四十六才）、『焚余稿』（同）、『皇清詩選』全三十巻を数十部購入（五十九歳）、『中山詩文集』刊行（六十三歳）等のように、琉球国内ばかりではなく、当時の中国や日本を巻き込んで広がっていったものがあり、功績としては、絶大なものであった。

注一　程泰祚の経歴に関する「程氏家譜」の原文は、次の通りである。（『那覇市史　家譜資料二（久米村篇）』所収昭和五十五年三月参照。）

官爵

順治八年辛卯三月結貴歆髻

順治十三年丙申四月十二日奉　王命初入唐榮秀才

順治十五年戊戌十二月十七日陞通事擢筑登之座敷

康熙二年癸卯七月二十二日頂戴黄冠

康熙九年庚戌五月初二日陞都通事
熙十年辛亥十二月二十二日擢勢頭位
勲庸
康熙二年癸卯七月二十二日奉　使為謝恩存留通事随法司王翼呉国用北谷親方朝暢
紫金大夫金正春多賀良親方於十一月十四日同天使宝舟那覇開船赴門留駅三年（中略）乙巳年六月初七日帰国
康熙九年庚戌五月初二日奉　使為進貢在船都通事将臨行偶得重病辞而不行
康熙十一年壬子七月初六日奉　使為進貢都通事随耳目官呉美徳名嘉真親雲上朝衆正議大夫蔡彬喜友名親雲上十
月十五日捧表上船不得順風翌年三月初三日開船赴門（後略）

注二　尚寧の冊封正使夏子陽の『使琉球録』には「今諸姓凋謝、僅存蔡、鄭、林、程、梁、金六家而族不甚蕃」と
ある。（『那覇市史』冊封使録関係資料（原文編）昭和五二年三月参照。）尚質の冊封使として渡来した汪楫
の『使琉球雑録』にも「今所存止蔡鄭梁金等七姓亦甚不振矣」とある。

注三　同注一「勲庸」の部分に
「康熙九年庚戌五月初二日奉　使為進貢在船都通事将臨行偶得重病辞而不行
康熙十一年壬子七月初六日奉　使為進貢都通事随耳目官呉美徳名嘉真親雲上朝衆正議大夫蔡彬喜友名親雲上
十月十五日捧表上船不得順風翌年三月初三日開船赴閩（後略）」という記述が見える。

注四　陳元輔（一六五六年・順治十三～　？）字は昌其。程順則が「勤学」として初めて福州に行った時（一六八
三）、その門下生として教えを受けて以来、終生の師弟関係にあり、程順則を通して多くの琉球人と交流し
た人物。程順則の編纂した琉球最初の漢詩文集である『中山詩文集』に序文を書いている他、「程大母恭人

伝」、「中山自了伝」（『中山詩文集』に収録）、『焚余稿』（同前）、『執圭堂詩草』序（同前）、『観光堂遊草』序（同前）等、琉球の詩人の序文や琉球人の伝記等がある。弟子の程順則が日本で出版した『陳山楼課児詩話』、『陳山楼詩文集』等の著作がある。

注五　原文は、次の通り。「次年五月二十四日福建起身八月二十四日到京」『那覇市史　家譜資料二（久米村篇）』所収　昭和五十五年三月参照。

注六　『雪堂燕遊草』は、拙編『校訂本　中山詩文集』九州大学出版会（一九九八）参照。

注七　『焚余稿』は、同注六。

注八　蔡温「答程大夫寵文書」（ハワイ大学ホーレー文庫蔵『琉球詠詩』所収）等参照。